

### 第三章 光る源氏の物語

#### [第一段 若宮参内(四歳)]

月日経て(数日して)、若宮参りたまひぬ(若宮は参内なさいました)。いとど(まるで)この世のものならず(別世界から来たもののように)清らに(清々しい=穢れ無い)およすげ(成長振り)たまへれば(だったので)、いと(帝は若宮の余りの超然さに)ゆゆしう(美人薄命の懸念すら)思したり(お感じに為ったのだった)。

明くる年の春、坊(東宮坊=皇太子、御世継ぎを)定まりたまふにも(御決めに為った時にも)、いと引き越さま(帝はよほど、第一皇子を飛び越して若宮の方を世継ぎに引き立てようと)ほしう思せど(したい気持ちは有ったが)、御後見すべき人もなく(若宮を盛り立てる有力な後見人も無く)、また世のうけ(世間受け)ひくまじき(大引き必至の)ことなりければ(ことだったので)、なかなか(相当)危く(あやうく、不穏な事態を招くと)思し憚りて(思い省みて)、色にも出ださせ給はず(そんな気配を微塵も御出し為さらずに)なりぬるを(していらしたのを)、「さばかり(帝は若宮をあれほど)思したれど(大事に思われても)、限りこそ(世の習いに逆らえない事も)ありけれ(あるものだ)」と、世人も(よのひとも、世間でも)聞こえ(云っている様で)、女御(弘徽殿女御=第一皇子の母)も御心落ちぬ(自分の子が世継ぎに決まって御安心)たまひぬ(なさいました)。

かの(其の一方で彼の)御祖母(おんおば)北の方(北の方は)、慰む方なく(なぐさむかたなく、若宮の立太子適わず生き甲斐を失くして)思し沈みて(おぼししずみて、悲しみに暮れては)、おはすらむ所にだに(故御息所の許だけに)尋ね行かむと(尋ねて行きたいと)願ひたまひし(願って御出での)しるしにや(現れか)、つひに(とうとう)亡せ給ひ(うせたまい、亡くなって)ぬれば(しまったので)、またこれを(帝は重なる不幸を)悲しび思すこと限りなし(深く深く悲しんだ)。御子六つになり給ふ年なれば(若宮も6歳になっていたの)、このたびは(この祖母の死は、母が死んだ3歳の幼い時と違って)思し知りて(悲しみを覚え)恋ひ泣きたふ(祖母を慕って泣かれた)。年ごろ(何年も)馴れ睦び(若宮に慣れ親しんで)きこえ(頂いて)たまひつるを(参りましたのに)、見たてまつり置く(若宮を残したまま先立ってしまう)悲しびをなむ(悲しみばかりを)、返す返すのたまひける(北の方は付き人に何度も仰っていた)。

#### [第二段 読書始め(七歳)]

今は(今では若君は)\*内裏にのみ(うちにのみ、里を出て宮中だけに)さぶらひたまふ(侍い給う、暮らしていらした)。七つになりたまへば(君が7歳になったので)、読書始めなど(ふみはじめなど、勉強開始の儀式をして勉強をいはじめるよう)せさせたまひて(帝が君にさせたところ)、世に知らず(君は他に例を見ないほど)聡う賢くおはすれば(優れていらしたので)、あまり恐ろしきまで(帝は君の才能を末恐ろしいくらいに感じて)御覽ず(驚いていらした)。 \*若君にとって宮廷は父帝の許ではあっても、当時は母方の実家方が養育する習わしなので

異例待遇。これは帝の偏重に拠るものではあろうが、故大納言家方に有力な後見人がいなかったことをも意味している、との事。

「今は誰れも誰れも(たれも、どなたも)え(まさか)憎み(君を憎んだり)たまはじ(しないであろう)。母君なくて(母親がいないの)だに(だから)らうたう(郎党、庇って)したまへ(遣りなさい)」とて(と帝は云って)、弘徽殿(こきでん、第一夫人の部屋)などにも渡らせたまふ御供には(君を遊ばせるために連れて行っては)、やがて御簾の内に(みすのうちに、人目を避けた帝と弘徽殿だけの緊密な場にまで)入れたてまつりたまふ(君を御連れになった)。いみじき(強面の)武士(もののふ)、仇敵(あたかたき)なりとも(できえも)、見ては(この仲睦まじさを見れば)うち笑まれぬべき(つい笑みをもらす)さまの(態を)したまへれば(してしまうので)、え(まして第一夫人は君をとても)さし放ち(さしはなち、冷たく突き放したりは)たまはず(なされなかった)。女皇女(おんなみこ)たち二ところ(ふたところ、二人)、この御腹に(第一夫人には)おはしませど(いらっしやりましたが)、なずらひ(君と比べて)たまふべき(みるほどの御器量では)だにぞ(とても)なかりける(ありませんでした)。御方々も(後宮の他の御夫人方も)隠れたまはず(君を退けて隠れたりはしなかったが)、今より(君はまだ幼いというのに今でも既に)なまめかしう(優美で)恥づかしげに(子供扱い出来かねて)おはすれば(いらしたので)、いと(とても)をかしう(印象深く)うちとけぬ(身構えての)遊び種に(あそびぐさに、遊び相手だと)、誰れも誰れも思ひ(誰もがそう思っていると)きこえたまへり(云っていたようです)。

業との御学問は(わざとのおんがくもんは、漢詩文など正式の学科として習われた学問は)さるものにて(当然のこととして)、琴笛の音にも(音曲の才も)雲居を響かし(宮中の大評判で)、すべて言ひ続けば(其等を全て云い連ねれば)、ことごとしう(事々しゅう、煩いほど)、うたてぞ(ますます桁外れに)なりぬべき(なっていくそうな)人の御さま(君の成長振りで)なりける(ございました)。

[第三段 高麗人の観相、源姓賜わる]

そのころ、高麗人の(こまうどの、朝鮮からの使節で)参れる中に(御所に表敬に訪れた者の中に)、かしこき(高名な)相人(そうにん、人相見が)ありけるを(居るのを)聞こし召して(帝は御聞きになって、若君の相を知りたかったが)、宮の内に召さむことは(外国人を宮中に招いて貴人が直接対面することは)、宇多の帝の御誠めあれば(宇多天皇に禁じられているので)、いみじう忍びて(極秘裏に)、この御子を(若君のほうを)鴻臚館(こうろかん、外国使節の宿泊施設)に遣はしたり(出掛けさせた)。御後見だちて仕うまつる(従前から皇子の世話役として仕えていた)右大弁の(うだいべんの、高級官僚の右大弁が若君を自分の)子のやうに思はせて(子供のように相人に思わせて)率て(いて、若君を従えた形で)たてまつるに(相人の許に御連れすると)、相人驚きて(学者は若君を見て驚いて)、あまたたび(何度も若君の顔を見直しては)傾き(かたぶき、頭を傾けて)あやしぶ(不思議そうにしていた)。

「国の親となりて(国父と成って)、帝王の上なき(かみなき)位に昇るべき相(そう、にんそうを)おはします(御持ちの)人の(この人を)、そなたにて見れば(そうなったものとして、

その先を見れば、乱れ憂ふることやあらむ(却って国が乱れて良い事は無さそうです)。朝廷の重鎮(おおやけのかため、政府の要)となりて、天の下を輔くる(あまのしたをたすくる、国を富ませる)方にて(かたにて、人かど)見れば、またその相(どうもそれも)違ふべし(たがうべし、違うようだ)」と言ふ(相人は若君の相をそのように占った)。

弁も(右大弁も)、いと才(ざい、漢学)かしこき博士(はかせ、学者)にて、言ひ交はしたることどもなむ(相人と交した議論問答たるや)、いと興(きょう、興味)ありける(深かった)。(そこで兩名は其の後)文など(ふみなど、漢詩文を)作り交はして(互いに作って送り合っていたが)、今日明日帰り去りなむ(高麗人が帰国しようかと)とするに(いう時に)、かくありがたき人に(君のように高貴で稀な相の人に)対面したるよろこび、かへりては(その喜びが別れを前に反って)悲しかるべき心ばへを(悲しくなってしまうような気持ちを)おもしろく作りたるに(作って宮に送って来たところ)、御子もいとあはれなる(感銘深い)句を作りたまへるを、**相人は**限りなうめでたてまつりて、**若君に**いみじき贈り物どもを捧げたまつる。朝廷(おおやけ)よりも(からも御返しに)多くの物**相人に**賜はず。

おのづから(自ずから、極秘とはいえ役人の動き自体から)事(こと、高麗人が宮を觀相した噂)広がりて、漏らさせたまはねど(帝は口外されなかったが)、春宮(とうぐう=東宮、東の宮に住む皇太子)の祖父(おおじ)大臣(おとど、第一皇子の母なる弘徽殿女御の父たる右大臣)など、いかなることにか(なぜ第一皇子でなく第二皇子の觀相なのか)と思し(と思つて)疑ひてなむ(疑っていた)ありける(のでした)。

帝、かしこき(畏き)御心(おんこころ、御考え)に、倭相(やまとそう、倭人の觀相見)を仰せて(おおせて、召されて)、思しよりにける(既に觀立てられていた)筋なれば(御判断によって)、今までこの君(第二皇子)を親王(みこ、世継候補)にもなさせたまはざりけるを、「**同様に觀立てた高麗人の相人は**まことにかしこかりけり(本当に博学だった、ので良く説明してくれた)」と思して(から第二皇子の相が確認できたので)、「無品親王(むほんしんのう、母親の身分が低くて叙位されない親王)の外戚の寄せなき(げさくのよせなき、有力な後見人がいない)にては(立場にして、第二皇子を)漂はさじ(ただよわさじ、狼狽させたりはしない)。わが御世(みよ、帝位)もいと定めなきを、**第二皇子は**ただ人(ただうど、臣下)にて朝廷(おおやけ、政務)の御後見(おんうしろみ、要ではなく其の補佐)をするなむ(することこそ)、行く先も頼もしげなめること(将来に不安を残さないこと)」と思し定めて、いよいよ道々の才(みちみちのざい、専門的な漢学)を習はさせたまふ。

際ことに賢くて(際立つ賢さに)、ただ人には(ただうどには、臣下としては)いとあたらしけれ(充たらしけれ、勿体無いけれ)ど、親王(みこ)となりたまひなば、世の疑ひ(よのうたがい、皇太子に立つかもしれないという世間の懸念を)負ひたまひぬべく(負ってしまわれるであろう)ものし(ものなの)たまへば(だから)、宿曜(すくよう、占星術)の賢き道の人に(専門家に)勘へさせ(かんがえさせ、診立てさせ)たまふにも、同じさまに申せば、**帝は****第二皇子を**源氏(げんじ、元々の源は皇子という意味の姓を賜ることで皇籍を除いて臣下に下らせること)になし奉る可く(たてまつるべく、宣命すべく)思しきおきてたり(御決めになっていたのだった)。

[第四段 先代の四宮(藤壺)入内]

年月に添へて(年月を経ても帝は)、御息所の御ことを思し忘るる折なし。「慰むや(なぐさむや、少しは気が紛れるか)」と、さるべき人びと(評判の美人と周囲から紹介された人々を)参らせたまへど(宮中に御招きになりましたが)、「なずらひに(桐壺に準えて)思さるるだに(思える者さえ)いと(甚だ)かたき(難しい)世かな(この世であることか)」と、疎ましようのみ(帝はただ煩さがって)よろづに思しなりぬるに(何事も詰まらなく思うようになっていたところ)、先帝(せんだい=先代の帝)の四の宮の(しのみや、四番目の娘で)、御容貌すぐれたまへる(美人と)聞こえ高くおはします(評判も高く)、母后(ははぎさき、先帝の妃)世になく(こよなく)かしづき(大事に育てている)きこえたまふを(知られた内親王がいらっしゃいました)、主上にさぶらふ典侍(ないしのすけ、秘書)は、先帝の御時の(おんときの、御時から仕えている)人にて、かの宮にも親しう参り馴れたりければ、いはけなく(幼く)おはしましし時より見たてまつり(存じ上げ)、今も(今でも)ほの(仄、偶に)見たてまつりて(お見受け致しまして)、「亡せ給ひにしに御息所の御容貌に似たまへる人を、三代の宮仕へ(みよのみやづかえ=三代の帝に御仕え、先帝と前帝と今上)に伝はりぬるに(してきた私の聞く所でさえ)、え(他には)見たてまつりつけぬを(存知上げませんが)、後の宮の姫宮(きさいのみやのひめみや、この姫宮)こそ、いとよう(大変良く)おぼえて(故御息所に似て)生ひ出でさせ(御成長)たまへりけれ(なさいました)。ありがたき(得難い)御容貌人(おんかたちびと、御顔立ちの方)になむ(に御座います)」と奏しけるに(帝に申し上げたところ)、「まことにや」と、御心とまりて(帝は心に留められて)、ねむごろに聞こえさせたまひけり(先帝の後の宮へ姫宮の御入内のことを丁重に礼を尽くして申し入れられた)。

母后、「あな恐ろしや。春宮の女御(とうぐうのによご、弘徽殿)のいと(甚だ)さがなくて(意地が悪くて)、桐壺の更衣の、あらはに(露骨に)はかなく(窮地に)もてなされにし(追い込まれていった)例も(ためしも、前例も)ゆゆしう(忌まわしい)」と、思しつつみて(思い込んで)、すがすがしうも(とても祝儀とは)思し立たざりけるほどに(思い切れずに居るうちに)、後も亡せたまひぬ(其の後まで亡くなってしまいました)。

母后を亡くした姫宮が心細きさまにておはしますに、帝は「ただ、わが女皇女たちの同じ列に(つらに、自分を親代わりと)思ひ聞こえむ(思っていれば良い)」と、いと(大そう)ねむごろに(懇切丁寧に)聞こえさせたまふ(御誘いになりました)。さぶらふ人びと(姫宮に仕える女房たちを初め)、御後見たち(面倒を見ている人たちや)、御兄(おんせうと、姫宮の兄)の兵部卿の親王(ひょうぶきょうのみこ)など、「とかく心細くて(このように頼りなく)おはしまさむよりは(暮らしておいでになるよりは)、内裏住み(うちずみ、入内)せさせ(されて)たまひて(しまわれて)、御心も慰むべく(御安心して御過ごし下さい)」など思しなりて、参らせたてまつりたまへり(姫宮を参内させ奉ることになさいました)。

藤壺と聞こゆ(姫宮の住まいは\*藤壺という部屋で、内親王の入内となることから最高位の妃となり藤壺女御と申し上げます)。げに(本当に藤壺は)、御容貌ありさま、あやしきまで(不思議なほど)ぞ(良く)おぼえたまへる(桐壺に似ておいででした)。これは(この藤壺の方は)、人の御際まさりて(皇女なれば身分が高く)、思ひなし(それを他の妃たちも)めで

たく(認めて)、人も得(え、決して)貶め聞こえ(おとしめきこえ、悪口を言って傷付けたりは)たまはねば(しないので)、うけばりて(受け張りて、大きく構えて思うままに振る舞えたので)飽かぬことなし(不満など無かった)。かれは(一方、かの桐壺の方は)、人の許し(他の妃たちの納得を)聞こえざりしに(得られなかったので)、御心ざし(帝の桐壺への偏重が)あやにく(生憎、分不相応で罪深いもの)なりしぞかし(になってしまった)。思し紛るとはなけれど(帝の桐壺への思いは変わらないが)、おのづから御心移ろひて(次第に藤壺への思いが増して)、こよなく思し慰むやうなるも(見る見る傷心が癒されて来たというのも)、あはれなる(はかなく移ろい易い、真心は唯一ではない)わざなりけり(人の姿ではあった)。  
\*「藤壺」は「飛香舎(ひぎやうしゃ)」という殿舎の別名で、中庭にフジを植えてあったことに由来する。飛香舎は弘徽殿と並んで清涼殿に近く、最高位の妃に宛てられる。

#### [第五段 源氏、藤壺を思慕]

源氏の君(げんじのきみ、桐壺が産んだ臣下した御子)は、御あたり(帝の御側)去りたまはぬを(離れずにいらしたので)、まして(とくに)しげく(頻繁に)渡らせたまふ御方は(帝が御渡りになる御部屋の御方であった藤壺は)、え(さすがに)恥ぢ敢へ給はず(はじあえたまわず、いつまでも恥じて源氏の君から隠れてばかりいらっしゃるといふわけには行かなかった)。いづれの御方(おんかた、妃)も、われ人に劣らむと(入内するからには自分の器量は人並み以上だと)思いたるやはある(思っているところはあって)、とりどりにいとめでたけれど(それぞれに大変優れていたが)、うち大人びたまへるに(揃ってお年を召しているところに)、いと若ううつくしげにて(ひとときわ若いと見映えする藤壺が)、切に(せちに、頻りに)隠れたまへど(身を御隠しになっても)、おのづから(源氏の君はどうしても)漏り見(もりみ、隙間から覗き見)たてまつる(しておいででした)。

母御息所も、影だにおぼえたまはぬを(母の面影さえ覚えていない源氏の君だったが)、「いとよう似たまへり(藤壺女御は桐壺更衣に本当に良く似てらっしゃる)」と、典侍の聞こえけるを(御付きの者が帝に申し上げていたのを)、若き御心地(いとあはれと思ひきこえたまひて(幼心に慕わしく聞き覚えなさって)、常に参らまほしく(いつも藤壺のところに行きたがって)、「なづさひ(親しく)見たてまつらばや(御会い出来たら、どんなにいいだろうか)」とおぼえたまふ(御思いになった)。

主上も(うえも、帝も藤壺と源氏の二人は)限りなき御思ひ(愛すべき者)どち(同士)にて(なので)、「な(あまり)疎み給ひ(うとみたまい、源氏を疎んじなさり)そ(まするな)。あやしく(妖しく、不思議なほど)よそへ(寄そえ=比べる、典侍の言う藤壺と桐壺とが似るといふ比較が)聞こえつべき(納得できる)心地なむする(気がします)。なめし(無礼し)と思さ(思わず)、らうたく(郎党、庇って)したまへ(遣りなさい)。つらつき(面構=顔立)、まみ(眼差し)などは、いとよう似たりしゆゑ(源氏は母の桐壺に良く似ているので)、かよひて(通いて、其方と源氏が血の通った母子と)見えたまふも(見立てるのも)、似げなからず(見当違いでは)なむ(ないだろう)」など聞こえつけ(などと帝が藤壺に御言い含めを)たまへれば(なされれば)、幼心地(おさなごち、源氏は子供心)にも、はかなき花(摘花や)紅葉(もみじの枝)につけても(などを藤壺に差し上げて)心ざしを(好意を)見えたてまつる(御示しに

なりました)。こよなう(格別な)心寄せ(源氏の藤壺への思い入れが)聞こえたまへれば(広く知れ渡ると)、弘徽殿の女御、またこの宮(藤壺)とも御仲そばそばしき(稜々しき、とげとげしい)ゆゑ、うち添へて(そこに加えて)、もとよりの憎さ(元々の桐壺への嫌悪から源氏に抱いていた憎さ)も立ち出でて(も再燃して)、ものし(物し、不快な念)と思したり(を覚えなされた)。

世に(世間で)類無し(たぐひなし、明らかに後継)と見たてまつり給ひ(目され為されて)、名高う(誉高く)御座する(立太子なされた)宮(東宮一ノ宮)の御容貌にも、なほ(さらに)匂はしきは(におわしきは、際立つ見映えは)例へむ方なく(喩え様も無く)、うつくしげなるを(優れて御出での源氏の君を)、世の人(京処人は)、「光る君」と聞こゆ(お呼びしました)。藤壺ならび給ひて(藤壺も源氏と並ばれて)、御覚えも(おんおぼえ、帝の御寵愛も)とりどりなれば(それぞれに受けて御出ででしたから、この姫宮を源氏に対して世の人は)、「かがやく日の宮」と聞こゆ(お呼びしました)。

#### [第六段 源氏元服(十二歳)]

この君の御童姿(おんわらわすがた、源氏の子供姿が惜しくて)、いと(あまり)変へまうく(変えたくない)と思せど(おぼせど、帝は御思いだったが)、十二にて御元服したまふ(源氏12歳で成人式をなさいました)。居起ち思し(いたちおぼし、座したり立ったりしてあれこれ)いとなみて(式次第を帝御自身が指図されて)、限りある事に(決まり事の上に)事を添えさせたまふ(さらに工夫を付け加えられました)。

一年の(ひととせの、以前執り行った)春宮の御元服(とうぐうのおんげんぷく)、南殿(なでん=紫宸殿ししんでん、内裏正殿)にてありし儀式の、よそほしかりし(装しかりし、周到に拵え設けた)御響きに(おんひびきに、荘厳な趣に)落とさせたまはず(源氏の式も引けをとらせないように帝は取り計らわれた)。所々の(ところどころの、客人の間に用意した)饗(きょう=供応、接待の御馳走)など、内蔵寮(くらずかさ、の飾り付け)、穀倉院(こくそういん、の食物)など、公事に(おおやげごとに、公務の型通りに)仕うまつれる(勤め上げる、だけでは)、おろそかなることぞと(至らぬ事が有るかもしれない)、とりわき仰せ言ありて(殊更に御達しが有って)、清らを尽くして(きよらをつくして、上品に粗相なく)仕うまつれり(接待為されました)。

\*おはします殿(でん=清涼殿、帝が居間する東向きの御殿)の東の廂(ひんがしのひさし、正面の最前の間に)、東向きに(ひんがしむきに、正面向きに)椅子(いし、帝の腰掛けを)立てて(据えて)、冠者(かんざ、冠をつけて成人する者=源氏)の御座(おんざ=席)、引入の大臣(ひきいれのおとど、加冠行司役の高官、引入れは加冠時の動作)の御座、御前にあり(おまえにあり、帝の前に拝すべく配置された)。申の時(さるのとき、午後4時)にて源氏参りたまふ。角髪(みずら、真中分け長髪を側頭で輪に結んだ少年の髪型)結ひたまへるつらつき(面形)、顔のにはほひ(童顔の輝き)、さま(この今の姿を)変へたまはむこと(変えてしまうのは)惜しげなり(惜しまれた)。大蔵卿(おほくらきやう、財産管理長と)、蔵人(くらうど、近侍給仕が)仕うまつる(理髪の御用を仕った)。いと清らなる御髪(みぐし)を削ぐ

ほど(そぐほど、切るたびに)、心苦しげなるを(卿が躊躇いがちなを見て)、主上は(うえは、帝は)、「御息所の見ましかば(もし桐壺が此の式を見たなら、我が子の成長振りをどれほど晴れがましく思ったことだろう)」と、思し出づるに、堪へがたきを(涙が溢れそうなのを)、心強く念じ返へさせ給ふ(気を取り直して堪えていらした)。 \*此処で元服式の描写が語られる。成人式なので実質では式次第での祝宴での持て成し作法を覚えて社会人の仲間入りをする事と床初めが重要事の筈だが、形式上は髪結いと装束を子供様から大人様へ替える事が主行事となるらしい。特に髪は烏帽子を被る形が正式とされたので、ミズラの長髪を肩尻で切り落として頭上で髻モトドリの髻マゲを結び、其のマゲを烏帽子に引き入れて納めるようにした。此れを初冠(うひかうぶり)または初元結(はつもとゆひ)と言い、其のマゲを結う紐も貴族に在っては紫色と定められていた、という。

冠し給ひて(こうぶりしたまいて、理髪後に主題の加冠の儀を終えて)、御休所に(おんやすみどころに、控えの侍所に)まかでたまひて(いったん下がって)、御衣(おんぞ、成人服に)奉り替へて(着替えてから)、下りて(おりて、東庭に出て)拝したてまつりたまふ(帝に拝礼なされた源氏の)さまに(姿に)、皆人(みなひと、一同)涙落としたまふ(感銘を受けられました)。帝はた(帝は、といえは)、まして(誰よりも)え(深く)忍びあへたまはず(感慨を抱いて御出で)、思し紛るる折もありつる(藤壺を得て癒されては忘れることもあった)昔のこと、とりかへし悲しく思さる(思い返されては悲しまれた)。いと(まったく)かう(あのように)きびは(幼げな)なるほどは(姿をしていたほどの源氏だったので)、あげ(髪を上げて=成人の形をして)劣りやと(見劣りしないかと)疑はしく思されつるを(帝は御懸念されていたが)、あさましう(予想を超えて驚くほど)うつくしげさ(見映えの良さが)添ひたまへり(源氏には備わっていらした)。

ところで引入の大臣の皇女腹(みこばら、内親王たる妻が産んだ子で)にただ一人かしづきたまふ(傅き給う、大事に育てている)御女(おんむすめ)、春宮(とうぐう、皇太子)よりも御けしき(みけしき、内々の入内要請)あるを、思しわづらふ(決め兼ねて)ことありける(ことがあった、のも)、この君に(源氏の君に)奉らむの(捧げようとの)御心(おんこころ、お考え)なりけり(からだった)。内裏にも(うちにも、帝にも大臣は)、御けしき(みけしき、この儀についての御意向)を賜はらせ(近侍に伺わせて)たまへりければ(いたところ)、「さらば、この折の(源氏が成人した後の)後見なかめるを(世話役が居ないので)、添ひ臥しにも(そいぶしにも、御女を元服した夜の添寝役にさせなさい、恙無ければ添寝役はそのまま正妻になる)」と(と帝は御返事されて)もよほさせ(催させ、そのように事を運ばさせ)たまひければ(なされたので)、さ(大臣は式の前から然う)思したり(心算りしていた)。

そこで先ほど列席の一同がさぶらひに(侍所に、清涼殿南の控えの間に)まかでたまひて(退出給いて、下がって)、人びと大御酒(おおみき)など参る(召し上がる)ほど(という時に)、親王(みこ)たちの御座の末に(おんざのすえに、末席に)源氏着きたまへり(源氏がお座りになったので)。大臣(おとど)気色ばみ(けしきばみ、満を持して)きこえたまふこと(娘との婚儀の件を源氏に御伝えした)あれど(のだが)、ものの(世間に)つつましき(慣れていない)ほどにて(未熟さで)、ともかくも(源氏はなんとも)あへしらひ(御返辞が)きこえたまはず(御出来に為れなかった)。

やがて御前より(おまえより)、内侍(ないし、帝の秘書女官)、宣旨(せんじ)うけたまはり伝へて、大臣(おとど)参りたまふべき召しあれば、参りたまふ。御禄(おんろく、加冠役へ下賜される品)の物、主上の命婦(うえのみょうぶ、御傍付きの女房が)取りて賜ふ(取り次いで大臣に下げ渡した)。白き大桂(おおうちぎ、生地)に御衣一領(おんぞひとくんだり、一揃いの衣裳)、例(れい、決まり通り)のことなり。

御盃(おんさかずき、酒杯を賜わる)のついでに(折に、帝は次の歌を仰せられた)、

「いときなき初元結ひに(はつもとゆいに)長き世を 契る心は結びこめつや」(和歌 1-8)

「元服で短く削いだ髪結いに 長い縁が結い込めましたか」(意識 1-8)

御心ばへありて(帝はこのように心配されて)、驚かさせ給ふ(おどろかさせたまう、大臣を喚起させて婚儀の進展具合をお尋ねになった)。

「結びつる心も深き元結ひに 濃き紫の色し褪せずは」(和歌 1-9)

「結い込めた心を継なく結い紐の 濃い紫の褪せぬを願う」(意識 1-9)

と奏して(と帝に婚儀整いの返歌を奏して大臣は)、長橋(ながはし、清涼殿南下がり)より下りて舞踏(ぶとう、東庭で拝礼)したまふ(なさいました)。

左馬寮の御馬(ひだりのつかさのおんうま)、蔵人所の鷹(くろうどどころのたか)据ゑて(すえて、木に留らせて)賜はりたまふ(そこで帝は大臣に狩の馬と鷹を下賜されたので御座います)。御階(みはし、東庭への階段)のもとに親王(みこ)たち上達部(かんだちめ)つらねて、禄(ろく)ども品々に賜はりたまふ(続いて、列席の親王や公卿らが正面庭先の階下に連なつて、次々に、其々に応じた品々を賜ったので御座います)。

その日の御前(おまえ、形式上は源氏の御前への献上品)の折櫃物(おりびつもの、折詰め料理)、籠物(こもの、籠入り菓子)など、右大弁(うだいべん、源氏の世話係りを務めた文書実務の高官)なむ(なるものが)承りて(帝の仰せで)仕うまつらせける(御用意したので御座います)。屯食(とんじき、弁当)、禄の唐櫃(ろくのからびつ、記念品)どもなど、ところせきまで(所狭しと)、春宮の御元服の折にも数まされり。なかなか限りもなく(かえって前例がないほど)いかめしうなむ(盛大で御座いました)。

[第七段 源氏、左大臣家の娘(葵上)と結婚]

その夜、大臣の御里(おんさと、屋敷)に源氏の君まかでさせたまふ(退出させ給う、帝は源氏を婿入りに御出かけさせられました)。作法(さほう、大臣が源氏を婿に迎える持成し)世にめづらしきまで、もて(以て)かしづき(傳き、丁重であった)きこえたまへり(聞こえ給えり、との事で御座います)。源氏がいと(大変)きびは(初々しい)にて(様子で)おはしたるを(いらしたので)、大臣はゆゆしう(畏れ多い)うつくしと(御姿と)思ひきこえたまへり(思



ったそうで御座います)。女君(おんなぎみ、嫁君)はすこし過ぐし(少し年上で)たまへるほどに(いらしたので)、いと(婿君が大変)若うおはすれば(若くいらすのを)、似げなく(不釣り合いで)恥づかしと(恥づかしいと)思いたり(思っておいででした)。

この大臣の御おぼえ(おんおぼえ、帝からの御信任は)いと(大変に)やむごとなきに(大きなもので)、母宮(ははみや、嫁君の母で大臣の妻が)、内裏の一つ后腹(うちのひとつきさいばら、帝と同腹の兄妹)になむ(になる方で)おはしければ(いらしたので、大臣は帝の義弟に充あられるので)、いづ方に(大臣の人望と母宮の血統のどちらを)つけても(見ても)いと(大いに)はなやかなるに(誉れ高いのに)、この君さへ(源氏の君までが)かく(このように)おはし添ひぬれば(婿として一族に加わられたので)、春宮の御祖父にて、つひに世の中を知りたまふべき右の大臣(みぎのおとど、大臣は最高官職で、孫の東宮が帝位すれば、其の後見として権勢を誇る)の御勢ひは、ものにもあらず(今は然程には絶対的でもなく)圧され(おされ、互されて)たまへり(いました)。

大臣は御子どもあまた(数多)腹々に(はらばらに、何人かの妻妾に)ものし(作らせて)たまふ(いました)。中でも宮の御腹は(嫁君の母宮が御産みの方は)、蔵人少将(くろうどのしょうしょう、蔵人は近侍で少将は内裏警備の近衛指揮官だが、それを実際に兼務するというより肩書きを重ねた内裏での序列が高い貴人職)にて(という地位にいて)いと若う(大変若く)をかしきを(才長けた方ですが)、右大臣の(うだいじんの、眼力が)、\*御仲は(おんなか、両家の仲は)いと好からねど(あまり良くはないのだが)、え(決して)見過ぐしたまはで(この方の将来性を見逃されずに)、かしづきたまふ(傅き給う、大事に育てた)四の君(しのみや、弘徽殿女御の妹君に当たる)に併せ給へり(あわせたまえり、婿入りさせていました)。両家劣らず(もて、して)両婿を傅きたるは(かしづきたるは、大事にしていたのは)、あらまほしき(在って欲しい、在る可き、望ましい)御間(おんあはひ、婿舅の間柄)ども(同士)になむ(で御座いました)。\*「御仲」での両家とは右大臣家と当大臣家のことだが、大臣は左右一名なので当方は左大臣であり、格も左が主で右が副とされる。ここでも左大臣が家柄良く、帝と歳も近い様子が語られているが、弘徽殿などを通して描かれる右大臣の圧力や老獪ぶりからして、右大臣は相当な年長者と思われる。

源氏の君は、主上の常に召し(帝がいつも呼ばれては)まつはせば(身近に纏わせられるので)、心安く里住みも(ゆっくり大臣家で過ごしたり)え(全く)し給はず(なされなかった)。心のうちには、ただ藤壺の御ありさまを、類なしと思ひきこえて、「さやうならむ(あのような)人をこそ見め(みめ=御妻、妻にしたい)。似る人なくもおはしけるかな(似たような人にも会った事がない)。大殿の君(おおいどののきみ、左大臣の姫君たる妻は)、いと(とても)をかしげに(格別に)かしづかれたる(大事にされた)人とは見ゆれど(気品ある方だとは思ふが)、心にもつかず(心惹かれることはない)おぼえたまひて(そう思いなさって)、幼きほどの心(幼心に)一つにかかりて(思いつめて)、いと(とても)苦しきまでぞ(辛そうに)おはしける(悩んでいらした)。

[第八段 源氏、成人の後]

大人になりたまひて後は(元服された後の源氏を帝は)、ありしやうに(以前のように)御簾の内にも(みすのうちには)入れたまはず(御入れに為らなかつた)。御遊びの折々(源氏は藤壺が管弦を奏する時の)、琴笛の音に(ことふえのねに、藤壺の琴に源氏が笛を合わせて)聞こえ通ひ(きこえかよい、心を通わせ)、ほのかなる御声を慰めて、内裏住みのみ(うちずみのみ、宮中暮らしばかりを)好ましようおぼえたまふ(好んでおられた)。五六日侍ひ給いて(いつかむゆかさぶらいたまいて、五、六日内裏に泊まって)、大殿に二三日など(おおいどのにふつかみかなど、大臣家に二、三日など)、絶え絶えにまかでたまへど(途切れがちに通われた源氏の君だが)、ただ今は幼き御ほどに、罪なく思しなして(大臣は源氏に罪は無いと考えて)、いとなみ(営み、御世話を)かしづき(丁重に)きこえたまふ(されていたということです)。

**左大臣は実際に**御方々(源氏と姫君)の人びと(付き人に)、世の中におしなべたらぬを(押し並べたらん、抜き出た者を)選りととのへすぐりて(選りすぐって)さぶらはせたまふ(仕えさせたのです)。御心につくべき(また源氏が望まれた)御遊びをし(催しを行い)、おほなおほな(おのおの、その各々に)思しいたつく(気遣いを労したのです)。

内裏には(帝は後宮には)、もとの淑景舎(しげいしゃ、桐壺の殿舎の正式名)を御曹司(みぞうし、源氏の部屋に宛がい)にて、母御息所の御方の人びと(亡き桐壺から仕えていた御女中を)まかで散らず(散り散りに解雇せず)さぶらはせたまふ(そのまま引き続き仕えさせていらした)。

里の殿(さとのとの、故桐壺更衣の実家、故大納言邸)は(の方は)、修理職(しゅりしき、大工)、内匠寮(たくみづかさ、飾職)に宣旨下りて(帝の命によって)、二なう(になう、二つと無いまで立派に)改め造らせたまふ。もとの木立、山のたたずまひ(築山の様子)、おもしろき(既に趣ある)所なりけるを、池の心広く(こころひろく、以前より広めに)しなして(してあって)、めでたく造り(立派な造営だと)ののしる(評判が高い)。「かかる所に(こんなところに)思ふやうならむ人を(意中の人を)据ゑて(迎えて)住まばや(住みたいものだ)」とのみ(と源氏は屋敷を眺めては、そんなことばかり)、嘆かしよう思しわたる(思っただけで嘆いていた)。

**このような源氏の君の**「光る君といふ名は、高麗人の(高麗の相人が)愛で聞こえて(めできこえて、源氏を誉め讃えて)付け奉りける(つけたてまつりける、お付け致したものと)ぞ(なのだと)、言ひ伝へたるとなむ(言い伝えられているという、わけなのです)。

(2008年12月30日、読了)